

新

歌人群像

村野次郎

● 時流くみに与くみせず

● 千々和久幸 ●



白秋文学の熱病に感染

父の意にそむきてわれら文学に走りいまだに豊かにあらず
『村野次郎歌集』

一九六三（昭和三十八）年、六十九歳の村野次郎は多少の韜晦たうかいをこめてこう詠んだ。父の意いに叛そむいてすでに五十年が経過していた。

次郎の父儀右衛門ぎえもんは、東京府北多摩郡多磨村上染谷（現・府中市白糸台）で酒、その他雑貨の卸・小売りを手広く営む村野商店の四代目であった。村野家はこの地に江戸時代から続いた素封家で、天保時代からは代々の長男が儀右衛門を襲名して家業の商業を継いだ。次郎の父四代目儀右衛門は、自らは寒翠かんすいと号する俳人であったが、その生前、次郎が文学の道に進むことを許さなかった。一九〇六（明治三十九）年、次郎は府立第二中学（現・立川高校）に入学したものの、文学熱を憂慮した父の助言で早稲田実業学校への転校を余儀なくされている。

呼びまどひよろこびましき母の子は二郎

次郎三郎四郎五郎六郎は欠けて七郎

歌集『夕あかり』所収の一首。村野兄弟は



前列中央の白スーツ姿は北原白秋。その後ろの着物姿が村野次郎

文学という虚業だけでなく、家業の商人の血をも引き、実業の世界でもそれぞれが目覚ましい足跡を残している。次郎の兄一郎は五代目儀右衛門を継いだが、次郎は歌人にして実業家。三郎は西条八十門下の詩人であり、村・市会議員。四郎は詩壇におけるノイエ・ザハリヒカイト文学運動の先駆者で、後に現代詩人協会会長も務めたが、自身は理研コンツェルンの役員を歴任した。五郎は一九四三（昭和十八）年、南太平洋・ソロモン海で戦死。六郎は幼没。七郎は味岡商店の経営にあたり、全国袋物卸商団体連合会会長を務めた。ちなみに、現在の株式会社村野商店は、七代目の儀右衛門が経営に当たっている。

「村野家では次郎が北原白秋から文学の熱病を移され、それに弟の三郎、四郎が感染したものだ」と、四男の四郎が晩年に述懐している通り、村野家の兄弟は次郎が持ち込んだ熱病に次々に感染していった。

さて、その次郎の文学への熱病は、「文章世界」「朱鑾」への投稿に始まる。一九一四（大正三）年、次郎は生涯の師となる北原白秋を東京・麻布坂下町の「巡礼詩社」に訪ね、ただちにその門下に加わった。時に白秋二十九歳、次郎は早稲田大学商学部に入學したばかりの二十歳であった。

矢羽麦シルクハットに輝けば夕日かなし
くめぐりやまずも 『夕あかり』

「父を埋むる」と詞書のあるこの作品は、次郎が白秋と見えたその年、四十九歳で病没した父儀右衛門の死を悼んだもの。詞書がなければとても挽歌とは思えないロマンチックな雰囲気を持つ作品で、若い次郎の詩への志向が窺えて興味深い。

白秋と次郎と「香蘭」

「大正七年一月一日。北原白秋謹んで河野慎吾、村野次郎両君の爲めあらゆる責任と愛と

を以て茲に之の推讃の辞をおくる。（中略）茲に両君かの人及び歌を讃え、改めて紫烟草舎中、及び姉妹結社巡礼詩社の諸同人に披露し、更に日本詩歌壇に推薦し、博く世上に之等俊秀なる歌人の出現を告ぐ」と、白秋が力をこめて歌い上げた「推讃の辞」（「朱鑾」復活号）によって、次郎は新鋭歌人として華々しく世に出た。

次郎は白秋の主宰する「地上巡礼」「ARS」「曼陀羅」「ザムボア」、さらには「とねりこ」と常に師白秋の麾下にあったが、白秋が紫烟草舎を解散するに及んで短歌修業の場を失ってしまった。

かくして一九二三（大正十二）年、次郎は白秋を顧問に中河与一、酒井広治、荒木暢夫、深野庫之介、石野正太郎、池上秋石らと「香蘭」詩社を結成し、機関誌「香蘭」を創刊するに至る。

次郎は白秋の気品と格調を重んずる浪漫主義精神に憧れながらも、その歌風は次第に現実的であり穏健なものに変容していった。

木がらしの街はふけたり銭湯にからだを
叩く音のひびかふ 『夕あかり』

街に住み親しむこともなかりつる秋空は
れて雁わたる見ゆ

村野次郎



前列中央のスーツ姿が村野次郎、右端の着物姿は中河与一、後列学生服は木俣修（1930年ごろ）

壮年期の作品だが、壮^{さか}んな命が持つ覇気や情熱にくまどられた文学的な野心は希薄だ。むしろ分厚い人生経験を積んだ余裕のごときものが作品におおらかな滋味を与え、豊かな艶^{つや}さえ感じさせる。

「香蘭」は次第に白秋直系の唯一の結社誌として歌壇に重きをなしていった。が、白秋にはそれが我慢ならなかった。次郎の歌風が白秋から逸^それていくことも、また顧問という立場では自分の文学理念に従って雑誌を独裁的に運営することもできないという不満が募つ

ていった。「香蘭」との訣^{けつ}別は避けえないところまできていた。

はたせるかな些^さ細^{さい}なことが引き金になって白秋と次郎との間に齟^そ齧^ごが生じ、一九三五（昭和十）年、白秋はかねての念願通り「近代の幽玄体の樹立」を掲げて「多磨^{たま}」を旗揚げするに至る。

反骨の二足の草鞋

白秋と袂^{たもと}を分かつたざるをえなかった次郎と「香蘭」は、組織を立て直し、次郎が主宰者としてこれまで以上に編集・運営の前面に立つことになった。

一九三七（昭和十二）年に「香蘭」は創刊十五周年を迎え、その記念事業の一環として翌三八年には次郎の第一歌集『樗^{ちゆう}風集』が刊行された。一九二七年から三五年までの作品五百八十首を取めたこの歌集は、当時では珍しかった海外詠九十六首を含み、次郎の歌人としての力量と位置を決定づけた記念碑的歌集である。

樓門をいでてゆきたるからかさの明^{あか}く見えて雨あがるらし
すぎし日はさみしかれども花八つ手み冬に近く色たちにけり



前列左から2人目が村野次郎、中列左から3人目は筆者（1958年8月）

あてどなきあくがれかなしあはあはと今日も消^けのこる夕明^{ゆふあか}り空

目を幾目越え来し海かしつむ日のはたての空のあかく静けさ（太平洋上）

高層建築街空中に居て見下ろせば目にしづもれる墓^{かぶ}かとも見ゆ（ニューヨーク市街）

いずれの作品も、わずかに哀愁の翳^{かげ}りを帯びた、平明にして流麗な歌風である。海外詠は一九三二（昭和七）年のものだが、次郎は当時、銀座で舶来用品の輸入販売を業とする森田屋の経営に携わっていた。この一連の作

実業家として最後の事業は明宝ビル（東京・西新宿）の建設だった。その屋上で（1971年、77歳）



品は、商用を兼ねて北・中米を歴訪した四か月間に詠まれたものである。

次郎は『樗風集』の巻末記で次のように書いたのだ。

「……表現の点に就ても無理に難解な言葉を使用することよりも、寧ろ難解な事象も如何に平易に表現すべきかに務めて来たつもりである。更に本質的に言へば世の時流なるものに捉へられることより如何にして自己本来の姿を表現すべきかに意を用てきたと信じてゐる。」

次郎の言葉遣いの平易さ、歌境の平明さは現実主義に即し、柔軟な抒情質とのびやかな調へには気品と格調が漂う。しかし作品の

背後にある「時流なるもの」を拒絶する烈々たる反骨精神については、その実業家としての才覚とともに語られることが少ない。

天才白秋を傍ら近くに正師と仰ぎ反面教師ともした次郎は、「時流なるもの」に迎合することの卑しさ・空しさ、そしてまた生活の裏付けを欠いた文学の危うさ・ひ弱さを肌で感じ取っていたに違いない。「村野は商売をやりながら歌をやっている」と、一杯機嫌の白秋に揶揄された次郎、白秋門の逸足でありながら歌壇の傍流として後続の風下に置かれても意に介さない。次郎は悠然と己の信ずる道を貫いた。

次郎の文学（虚業）と経営（実業）の二足の草鞋に懸けた夢と合理的思考は、四郎流に言い直せば「精神に詩を、肉体に実業を」を、ごく自然に実践したまでだということになる。

白秋は歌を人生に、 次郎は人生を短歌に

清らかに冷えし空気に身を伸べて一夜
山の高きにねむる

『村野次郎歌集』

蛭蛙われより清き備へして冬来る土に眠
りつらんか

『明宝』

抒情うすれ即物的になりゆくを老いづく
日日のかなしみとする

あかときのひよどり鳴けり冬木々のあた
りしきりに明るくなりて

『角筈』

あたたかきこの日和かも大き蝶さはさは
として庭よぎりゆく

次郎の至りついた歌境を示す作品である。おおらかで滋味豊かな詠み口は壮年期から一貫して変わらない。ちなみに、一九七〇（昭和四十五）年十一月号の「短歌研究」に発表した「人生百首」は、斎藤正二氏をして「わたくしが真先受けた感銘は、こりゃあ、人生の達人」の歌だぞ、此の世の中に文学よりずっと大事な何かに通暁した、おとな」が歌つてみせた作品だぞ、と云ふことであつた」と言わしめた。

白秋には詩歌が即人生であり、次郎には歌は人生の一部であつた。白秋は生きるために人生を歌にし、次郎は歌うための基盤たる生活の充実を人生として生きた。生涯に歌集六冊、歌話二冊を残し、次郎は一九七九（昭和五十四）年、八十五歳の天寿を全うしてこの世を去つた。

（ちぢわ・ひさゆき「香蘭」代表・選者）